

令和7年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

知的障害特別支援学校における生活科・理科・社会科のカリキュラムモデルの創造
—横断的で連続性のある学びを目指して—

2 研究の概要

本研究は、先行研究の分析から対象教科を生活科・理科・社会科とし、知的障害特別支援学校における教科別の指導に関する研究開発を実施したものである。

副題の「連続性」については大きく2点を捉えており、一つ目は、現行の学習指導要領の比較から小学校と特別支援学校の学校種間の連続性である。そして二つ目が知的障害特別支援学校内に関するもので、特に中学部と高等部の連続性である。これは現行の特別支援学校学習指導要領（中学部・高等部）の構造や知的障害特別支援学校の授業時数を踏まえた際、学部間の連続性も踏まえることで生徒の資質・能力の育成を段階的に育むことができるのではないかと考えた。

その取り組みとして、年間複数回行う校内授業研究会を全校で取り組む評価機会に、現行の学習指導要領（小学校と特別支援学校）をもとにした知的障害特別支援学校の学習指導要領草案（生活科・理科・社会科）を作成した。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

現行学習指導要領（特別支援学校・小学校）では各教科の目標や内容が系統的に示されたとともに、生活科は「小学部と小学校1・2年」、理科・社会科は「中学部と小学校3・4年」「高等部と小学校5・6年」に関連性が図られている。一方で特別支援学校学習指導要領には「自立と社会参加」をキーワードに、知的障害のある児童生徒の特性等を踏まえた目標・内容・内容の取扱いも示されており、多様な学びの場ごとに特別支援教育の充実を図ること、いわゆるインクルーシブ教育システムの推進が重要であることが示唆される。そのようなことから、カリキュラムが児童生徒一人一人の実態にできる限り寄り添うものであること、そして自立と社会参加に繋がる学習経験を積み重ねるものであることが重要であり、このような視点に立ったカリキュラムの編成が資質・能力の一層の育成を図ることが可能となると考えられる。

そこで本研究では、先行研究を踏まえ生活科・理科・社会科に焦点化し、知的障害のある児童生徒の資質・能力を段階的に育成できるカリキュラムを例示することに取り組むこととした。なお研究推進に当たっては「カリキュラム開発の考え方」（表1）を整理し、4年間の研究開発を進めた。

表1 本研究におけるカリキュラム開発の考え方

教科	考え方								
生活科	授業時数は十分に確保できるため(右図)、児童の実態に応じて段階的に資質・能力を育むことができるカリキュラムを検討する。	標準授業時間数	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
		生活科	102	105					207
		理科			90	105	105	105	405
		社会科			70	90	100	105	365
理科	授業時間数は限られるため(右図)、内容の精選や創造、そして軽重を検討するとともに、中学部と高等部を連続的に捉えるようにする。中学部と高等部を連続的に捉えることで、授業時間数の確保だけでなく、合計6年間を通して生徒の学びを段階的に深め広げることに繋がるカリキュラムを検討する。	授業時間数(本校)	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
		小学部生活科	54	54	82	82	82	82	436
社会科	授業時間数(本校)	1年	2年	3年					合計
		中学部理科	35	35	35				105
		中学部社会科	35	35	35				105
	授業時間数(本校)	1年	2年	3年					合計
		高等部理科	35	35	35				105
		高等部社会科	35	35	35				105
授業時間数(小学校標準授業時間数と本校の各教科) ※本校中学部は合わせた指導(生活単元学習)を一部実施しているため、理科・社会科の総時数は「52時間」になるが、教科別として年間35時間を設定しており、研究対象は教科別の時数とした。									

(2) 教育課程の特例

本研究における教育課程の特例は表2の通りである。

表2 本研究における教育課程の特例

学部	特例の内容
小学部	特別支援学校生活科の目標及び内容について、小学校生活科の目標及び内容の全部または一部を取り扱うこと。
中学部	特別支援学校理科・社会科の目標及び内容について、小学校理科・小学校社会科の目標及び内容の全部または一部を取り扱うこと及び授業時数の調整。
高等部	

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

①生活科 (小学部)

初めに各生活科の内容を比較検討し目標に関連性があること、一方で内容は相違が見られることを確認した。次に「小学校生活科の内容構成の具体的な視点(11視点)」が特別支援学校生活科にも十分関連性があることに着目し(図1)、授業研究会等での実践・協議・評価改善等を繰り返しながら本研究の生活科の内容を整理した(図2)。

特別支援学校生活科	生活科の視点	小学校生活科	本校小学部生活科の内容	特別支援学校生活科	小学校生活科
(1) 基本的生活習慣	健康で安全な生活	【学校、家庭及び地域の生活に関する内容】	身近な人々と関わる活動に関する内容		
(2) 安全	基本的な生活習慣や生活技能	(1) 学校と生活	I 見通し(集団生活における日課・予定)	ウ(日課予定)から作成	
(3) 日課・予定	遊びの工夫	(2) 家庭と生活	II 遊びの広がり	エ(遊び)オ(人の関わり)から作成	
(4) 遊び	生産と消費	(3) 地域と生活	III 生活や出来事の伝え合い	オ(人の関わり)カ(役割)	(8)から作成
(5) 人との関わり	身近な人々との接し方	【身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容】	IV 地域との関わり	オ(人の関わり)コ(社会の仕組み)	(3)と同様
(6) 役割	情報と交流	(4) 公共物や公共施設の利用	V 公共物や公共施設の利用	ケ(さまり)コ(社会の仕組み)	(4)と同様
(7) 手伝い・仕事	地域への愛着	(5) 季節の変化と生活	VI 金銭の扱い	ク(金銭の扱い)から作成	
(8) 金銭の取扱い	時間と季節	(6) 自然や物を使った遊び	VII 季節の変化と生活(飼育栽培含む)	サ(生命・自然)	(5)から作成 (7)動植物の飼育・栽培
(9) きまり	公共の意識とマナー	(7) 動植物の飼育・栽培	VIII 身近なものの不思議	シ(ものの仕組みと働き)から作成	(6)自然や物を使った遊びから作成
(10) 社会の仕組みと公共施設	身近な自然との触れ合い	(8) 生活や出来事の伝え合い	IX 自分自身の生活や成長に関する内容	カ(後割)キ(手伝い・仕事)	(9)と同様
(11) 生命・自然	成長への喜び	【自分自身の生活や成長に関する内容】	X 基本的な生活習慣や生活技能	ア(基本的生活習慣)イ(安全)から作成 キ(手伝い・仕事)追記	(1)学校と生活(2)家庭と生活
(12) ものの仕組みと働き		(9) 自分の成長			

※特別支援学校生活科について(数字)は資料作成者が便宜上、記している。指導要領ではナシ(リング)で示されていない。

図1 生活科の内容と視点に関する表

図2 本研究の生活科と現行生活科の関連

②理科（中学部・高等部）

理科の内容を検討する際の考え方

年間授業時数（35時間）を踏まえた時、全ての内容を網羅するよりも、どのような内容をどのように方法で学ぶことが良いかといった精選や創造の視点が重要になると考えた。そこで内容を検討する際の考え方を整理し、学校全体で共有しながら検討を進めるようにした（表3）。

表3 本研究における理科の内容検討の考え方

□ 知的障害があることを理由に、小学校理科2区分4領域のうち草案で取り上げない領域は作らない。 →知的障害特別支援学校でも、単元開発や授業づくりの工夫をすることで生徒が主体的に4領域を学ぶことができるということを示すことが重要であると考えている。
□ 現行の指導要領で示されている内容を網羅することはしない。 →4領域（エネルギー、粒子、生命、地球）を全て取り上げるが、学部在籍期間・3年間の指導計画における領域の軽重は工夫が必要であると考えている。これは、知的障害のある生徒が理科の見方・考え方を働きかせ、自然の事物・現象に主体的に関わることで、より資質・能力の育成を図ることができると考えているためである。

③社会科（中学部・高等部）

現行学習指導要領（特別支援学校と小学校）の比較

現行の特別支援学校学習指導要領では、内容は中学部・高等部で各6項目、計12項目が示されている。目標に加えて内容も小学校との関連が見られ、地理・歴史・公民の3分野から構成されている。一方で、特別支援学校独自の内容として「社会生活ときまり」がある。これは特別支援教育の理念である「自立と社会参加」を具体化したものであり、本研究の研究開発においても引き継ぐ視点であると考えている。

④段階の考え方

学習指導要領の変遷、そして段階に関する考え方を踏まえた上で本研究では段階別目標設定について、仮説をもとに検討した（表4）。インクルーシブ教育システムの推進の一つとして「多様な学びの場における特別支援教育の充実」が挙げられ、具体的には通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校のそれぞれの学びの場に応じた特別支援教育の取り組みが期待されている。そのうち通常の学級では、全体目標をもとに児童生徒の教育的ニーズに応じて個別の指導目標を設定し、必要な手立てを講じ、学習を評価することが求められている（図3）。本研究においてもこの考え方をもとに検討を行った。

表4 段階別目標設定に関する本研究の仮説

児童生徒の評価については現行の特別支援学校学習指導要領で示されている段階別目標設定ではなく、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（国立教育政策研究所, 2020）を参考に、全体目標（単元・授業）を受けて個別の指導目標を設定するプロセスにすることも可能であることが考えられた。個別の指導目標を設定する際には、特別支援学校学習指導要領で示されている「段階の考え方」をもとにすることで、指導者間で児童・生徒の実態・目標・目標達成のための手立てを共通理解する指標になるのではないかと考えている。

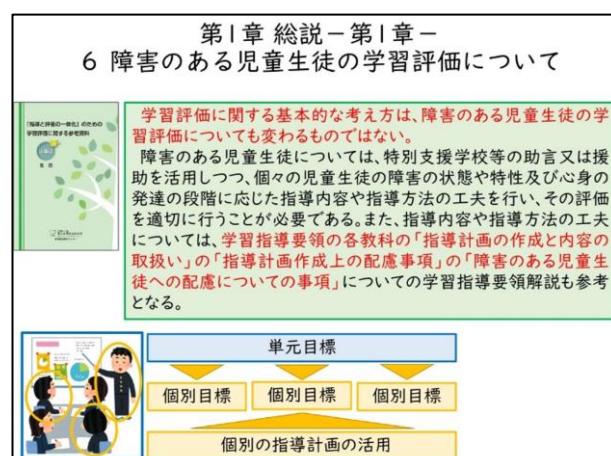


図3 本研究における目標設定のイメージ

(2) 研究の経過 (表5)

表5 研究の経過 (実施内容等)		
第一年次	<p>これまで本校では国語科、算数・数学科、生活科を中心に教科別の指導を行ってきた。一方で、理科・社会科については合わせた指導を中心実施しており、2022年度(第一年次)が教科別の指導への本格的な移行初年度であった。そのような背景から、運営指導委員の先生を中心に外部講師の講話や職員同士の意見交換などの場を設定し、教科別の指導に関する見方や考え方を深めるような機会をもつようにした。加えて、生活科と社会科を対象教科に2学期の授業研究会、3学期の研究発表会を通して、実践的に内容を深めていった。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>(全国アンケート調査・82校)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(学習計画の整理・検討)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(研究会・研修会)</p> </div> </div>	
第二年次	<p>各教科共通の研究手続きを整理することで、一体的に研究開発を進めることを目的に、研究1年次目から社会科に焦点化し検討を進めた。具体的には校務分掌(研究部)を中心に特別支援学校学習指導要領と小学校学習指導要領の比較検討を行い、本研究が目指すカリキュラムモデルの検討を進めた。そして本研究で作成する学習指導要領草案の内容について、研究部会・学部研究会・全校授業研究会を通して段階的に内容の精度を高めるようにした。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>(学習指導要領草案)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(授業研究会)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(文部科学省・実地調査)</p> </div> </div>	
第三年次	<p>カリキュラム開発について、田中・根津(2009)※は「カリキュラム開発とは、第一に教師集団が開発の主体となって、第二に単元を教科書・教材から児童・生徒の学習経験に移して計画し、そして第三に授業からカリキュラムを改善する活動である。この改善においてカリキュラム評価が大きな役割を果たす。」と述べている。本研究では2年次目までを通して教師集団主体、児童生徒の学習経験からの計画に関する取り組みを進めてきた。そこで3年次目はカリキュラム評価について、先行研究及び学習指導要領をもとに評価手続きを開発し、授業研究会を評価機会としカリキュラム開発を進めた。また1年次目のアンケート調査を拡大し、知的障害教育における生活科・理科・社会科の実態や課題等について明らかにし、学習指導要領草案の作成に繋げるようにした。※〈文献〉田中統治・根津朋実編著(2009)『カリキュラム評価入門』勁草書房</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>(全国アンケート調査・721校)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(カリキュラム評価シート)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>(授業研究)</p> </div> </div>	

第四年次	<p>現行の特別支援学校学習指導要領「段階の考え方(7段階)」をもとに、個別の指導目標や課題別のグループ編成を行う際の基準として本研究における「段階の考え方(7段階)」を整理した。9月に開催された日本特殊教育学会では生活科・理科・社会科について自主シンポジウムを企画・実施し、成果の発信やディスカッション等を通して内容の深化を図った。</p> <div data-bbox="298 332 652 586"> </div> <div data-bbox="695 339 1002 586"> </div> <div data-bbox="1044 339 1379 586"> </div> <p>(段階の考え方) (特殊教育学会) (授業研究)</p>
------	---

(3) 評価に関する取組 (表6)

表6 評価に関する取組	
第一年次	<p>授業研究会(2学期・3授業)、研究発表会(3学期・3授業)での実践及び外部からの指導助言を通して、校内職員を対象に研究会・事後アンケート調査を実施した。アンケート調査を通して、現在の課題を明らかにするとともに、その改善に取り組むようにした。</p> <p>なお学期末には研究室訪問等を通して当該年度の研究内容について説明するとともに、次年度に向けた助言をいただくようにした。</p> <div data-bbox="266 1051 711 1242"> </div> <div data-bbox="732 1057 1144 1224"> <p>(左図) 2023年2月10日に実施した研究発表会の参加者アンケート結果。同じ質問項目で、毎回の研究会でデータ収集し、改善に取り組んだ。</p> </div> <div data-bbox="1149 804 1403 1001"> </div> <div data-bbox="1149 1024 1403 1221"> </div>
第二年次	<p>評価方法は1年次目同様とし、評価機会(授業研究会)を増やし実施した。 ※授業研究会(1学期3回、2学期3回)、研究発表会(3学期)</p> <p>なお学期末には研究室訪問等を通して当該年度の研究内容について説明するとともに次年度に向けた助言をいただくようにした。</p> <div data-bbox="266 1444 711 1635"> </div> <div data-bbox="732 1428 1144 1641"> <p>(左図) 2024年10月27日に実施した校内授業研究会(高等部・社会科)のアンケート結果。1・2年次共通の質問項目とし、結果を基に研究内容の評価・改善を重ねた。</p> </div> <div data-bbox="1149 1257 1403 1432"> </div> <div data-bbox="1149 1444 1403 1635"> </div>
第三年次 (グラフは授業評価の)	<p>開発した評価手続きについて、年間11回(生活科3回、理科4回、社会科4回)の授業研究会・研究発表会を対象に「授業評価」と「カリキュラム評価」を実施した。児童・生徒の学習の様子からの振り返りや全校職員によるカリキュラム評価を繰り返しながら学習指導要領草案の作成を進めた。</p> <p>【小学部はな組(1・2年)・生活科】「うかがはな? しづむかな?」(6月21日)</p> <div data-bbox="266 1859 1108 2028"> </div> <div data-bbox="1149 1796 1403 2001"> </div> <p>T1 宇佐美教諭</p>

結果	<p>【小学部そら組(5・6年)・生活科】「あきのおもちゃでたのしもう」(11月15日)</p>	<p>TI 田中教諭</p>			
	<p>【小学部つき組(3・4年)・生活科】「かぜをつかってあそぼう!」(2月7日)</p>	<p>TI 當真教諭</p>			
	<p>3年次目同様の評価手続きを継続し、年間8回(生活科2回、理科4回、社会科2回)の授業研究会を対象に「授業評価」と「カリキュラム評価」を通して学習指導要領草案の作成を進めた。</p>				
	<p>結果 (■全体 ■学部外 ■中学部 ■高等部)</p>				
	<p>評価の観点</p>				
第四年次 (グラフはカリキュラム評価の結果)	1 カリキュラムの共有	2 カリキュラムの背景	3 カリキュラムの拡がり	4 展開するための資源	5 カリキュラムの構想
	6 実現するための工夫	7 カリキュラム結果	8 カリキュラムのコスト	9 実践からの学び	10 一般化可能性
第四年次 (グラフはカリキュラム評価の結果)	<p>【中学部課題別グループ第3班・理科】「物と重さ」(6月27日)</p>		<p>MT 宮林教諭</p>		
	<p>【中学部課題別グループ第3班・理科】「ものの温度と体積(空気、水)」(10月24日)</p>		<p>MT 古江教諭</p>		
	<p>【高等部課題別グループ第3G・理科】「動物の誕生」(7月11日)</p>		<p>MT 石飛教諭</p>		
	<p>【高等部課題別グループ第3G・理科】「土地のつくり」(10月24日)</p>		<p>MT 石飛教諭</p>		

①(補足) 本研究におけるカリキュラム評価

本研究における3つの評価方法のうち「授業評価」は参観者(教員)、学習者(児童生徒)、保護者の3種類を校内に提案した。授業評価(学習者・保護者)は児童・生徒の実態に応じてさらに検討が必要であったため、全校一斉での実施は行わず、単元評価と共に各学部で運用しやすい方法で取り組むようにした。このような経緯から本研究では「授業評価(参観者)」と「カリキュラム評価」の2点についてまとめた。

②(補足) 授業評価の観点(表7)

表7 授業評価の観点

No.	観点	質問内容 ※回答は4件法(とても思うー思うーあまり思わないー思わない)
1	取り組みやすさ・安心感	児童・生徒は学習内容を理解し、進んで取り組む姿が見られていたと思う。
2	学習理解	授業者の説明・教示は、児童・生徒にとって分かりやすかったと思う。
3	達成感・充実感	児童生徒が「わかった」「できた」等を実感できる活動に配慮されていたと思う。
4	学び合い	児童生徒は友だちの考えを聞いたり協力したりしようとする姿が見られていたと思う。
5	次時への意欲、期待	児童生徒が次時へ期待をもち、意欲的に取り組もうとする活動に配慮されていたと思う。
6	教育的対応	学習題材は実態及び生活年齢に適したものであると思う。
7	学習環境	授業は、教材教具に工夫されていたと思う。
8	学習の計画	学習計画(時数設定や授業の構成など)は、授業を実施する観点から妥当であると思う。
9	環境的条件	指導者間で指導支援の連携や一貫性が図られていたと思う。
10	個別の目標設定	本時の目標は、児童生徒の実態から妥当であったと思う。

③(補足) カリキュラム評価の観点(表8)

表8 カリキュラム評価の観点

No.	観点	質問内容 ※回答は各項目を10点満点とし、個人ごとに点数化して回答する
1	カリキュラムの共有	主に授業研究会を通して、検討されたカリキュラムについてどれくらい知ることができたと思いますか?
2	カリキュラムの背景	学部の教育課程や学習集団の実態などを踏まえて、カリキュラムが計画・実践されたことについて、どれくらい分かったと思いますか?
3	カリキュラムの拡がり	(主体的な学びを大切にすることは前提で、)社会に開かれたカリキュラムという視点では、どれくらい計画・展開されていたと思いますか?
4	展開するための資源	カリキュラムを実施する上で、必要な資源(ひと・もの・こと)について、どれくらい分かりましたか?
5	カリキュラムの構想	カリキュラムが何を目指しているのか、その構想やねらいについて、どれくらい分かりましたか?
6	実現するための工夫	カリキュラムの構想を実現するために様々な工夫がなされていることについて、どれくらい分かりましたか?
7	カリキュラムの結果	カリキュラムの実践を通して考えられた学習の成果や課題(学びの様子や改善点など)について、どれくらい分かりましたか?
8	カリキュラム開発のコスト	カリキュラム開発に要したコスト(お金、時間、人手、場所、手間など)について、どれくらい分かりましたか?
9	他の実践からの学び	カリキュラム開発に当たって、他校種も含めて、どれくらい他の実践を参考にしながら検討し、計画・展開されていたと思いますか?
10	一般化可能性	開発しているカリキュラムが改訂後の指導要領に反映された場合、他の学校でこのカリキュラムを実施できると思いますか?

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①教員への効果

教育課程の運用について、これまでの本校の実践から学習指導要領に示された内容を在籍期間内で網羅することは可能であることを確認している。しかしながら、教科の視点に立った授業計画を立案することの難しさ、年間授業時数が限られていることによる学びの深まりにくさ等の困難や不安を感じることも多い。このことについては自校だけの課題ではなく、窪田・藤井(2020)が明らかにしたように全国の知的障害特別支援学校の教員が同じ悩みを有している。

そのようなことから、カリキュラムが児童生徒一人一人の実態にできる限り寄り添うものであること、そして自立と社会参加に繋がる学習経験を積み重ねるものであることが重要であり、このような視点に立ったカリキュラム開発を進めた。特に表9の視

点をもとにすることで、児童生徒の姿をもとに教師集団が主体となったカリキュラム開発に繋がったのではないかと考えている。ここで「教師集団」は特に当該学部の教員であり、一人一人が自学部のカリキュラム開発に主体的に参画することで、より実情に応じたカリキュラムが形作られると考えている(基本編成として、幼稚部2名、小学部10名、中学部7名、高等部7名)。

図4~6はカリキュラム評価「Q11.カリキュラムの意義」の平均点について、自学部と他学部で比較したものである。継続的に当該学部教員の評価が上昇を示したケース(図5,6)、実践の繰り返しを経て最後に評価が上昇したケースもある(図4)。このように学部状況に応じながらも、当該学部教員一人一人が主体的にカリキュラム開発に参画することが重要であり、2024年度1学期と2025年度2学期の平均点を比較すると、小学部は24点、中学部は16点、高等部は28点も数値が大きく上昇した。

表9 本研究のカリキュラム開発の考え方(参考;根津,2009)

1	教師集団がカリキュラム開発の主体となる
2	児童・生徒の学習経験に基づき単元を計画する
3	授業からカリキュラムを改善する(カリキュラム評価)

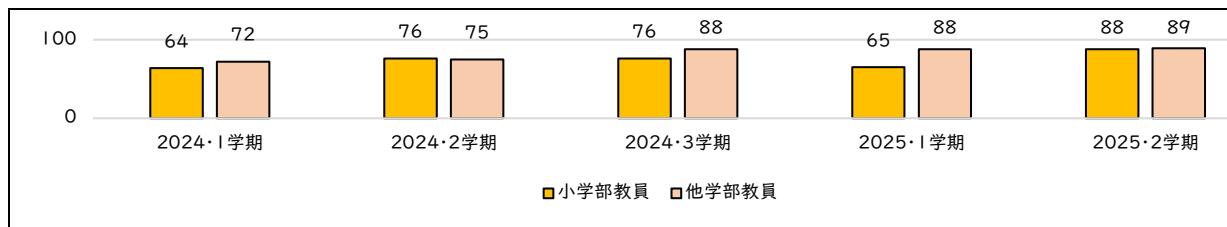


図4 小学部・カリキュラム評価「Q11.カリキュラムの意義」の平均点の比較

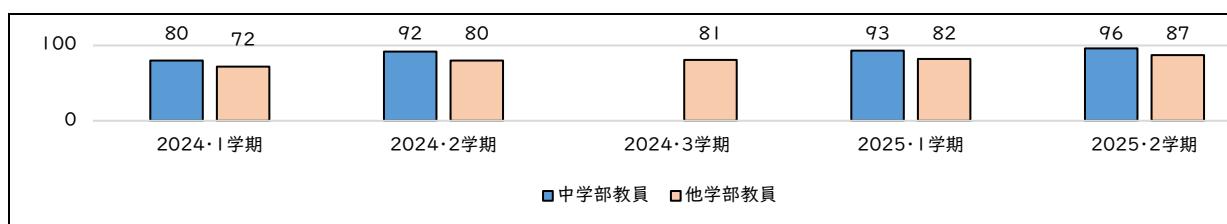


図5 中学部・カリキュラム評価「Q11.カリキュラムの意義」の平均点の比較

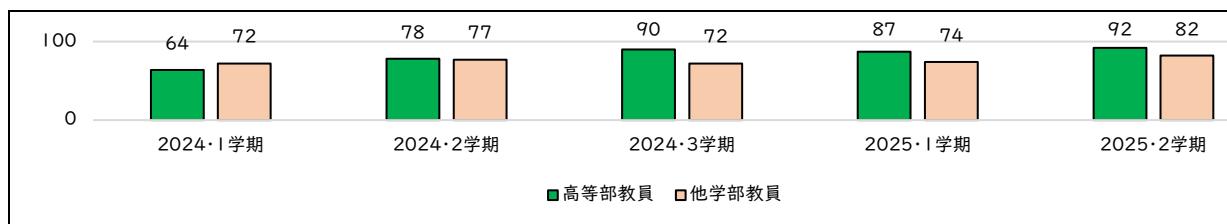


図6 高等部・カリキュラム評価「Q11.カリキュラムの意義」の平均点の比較

最後に授業及びカリキュラムの学校全体をまとめた結果についてグラフに示す(図7,8)。2024年度と2025年度で小、中、高等部の教師(合計24名)を対象とした調査結果について分析した。いずれの項目においても数値の上昇が見られたが、t検定を行った結果、例えばカリキュラム評価ではQ4を除く9項目で有意差を認めることができた。特に「Q3 カリキュラムの拡がり」「Q7結果」「Q9他の実践からの学び」は他の項目よりも数値の上昇がみられていたことから、学校全体で「自立と社会参加」や「社会に開かれた教育課程」をカリキュラムに反映するとともに、実践を通して考えられた学習の成果や課題(学びの様子や改善点など)の理解が深まり、教科の専門性を有した専門教員との協働や講師の指導助言などを通して、カリキュラムの意義を高めることができたと思われる。

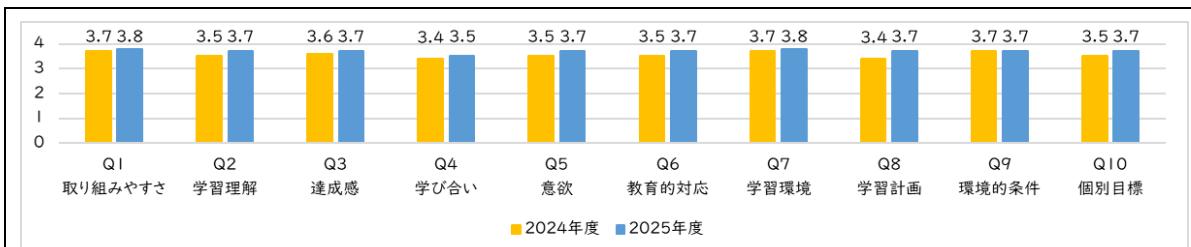


図7 授業評価の年度間比較(2024年度・2025年度)

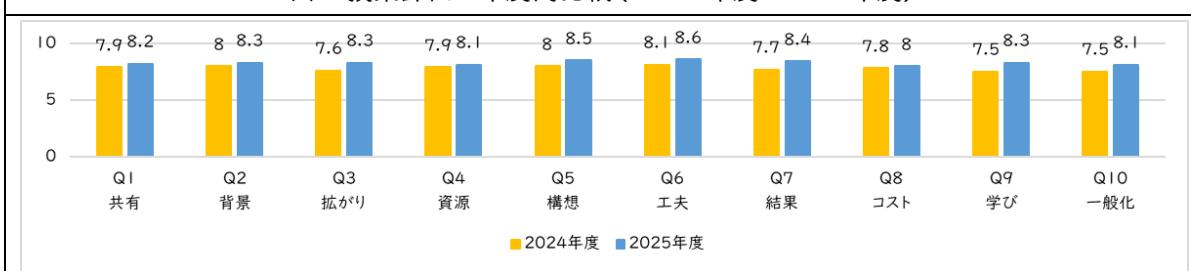


図8 カリキュラム評価の年度間比較(2024年度・2025年度)

また授業評価とカリキュラム評価の関係について検討するために、各項目間の相関係数を算出した。その結果、0.7以上の強い正の相関が13項目でみられていた。なかでも、授業評価のQ.10「個別の指導目標」はカリキュラム評価において4項目に強い正の相関がみられるなど、個別の指導目標はカリキュラム評価全体と密接に関連し合っていることが示された。多様な教育的ニーズを有する学習集団の授業においては、特に児童・生徒一人一人の目標設定・手立てを講じるといった特別支援教育の原理原則の重要性を明らかにすることができた。

②生徒への効果(事例生徒Aにおける理科アンケート記述の量的・質的変容)

カリキュラムの成果の検討の一つとして、生徒の学習状況について分析を行った。ここでは生徒A(1名)の例を記載する。方法として、理科の授業を開始した時期(2024年6月)と約1年半後(2025年12月)に同一内容の質問項目(自由記述6問、描画2問)によるアンケートを実施し、その結果を比較・分析した(表10)。実施時間は10分である。

表10 質問項目に対する回答結果

質問項目	2024.6.4	2025.12.18
回答数(回答数/問題数)	4/6(自由記述) 2/2(描画)	6/6(自由記述) 2/2(描画)
総文字	40	229(5.72倍)
語彙数	10	25(2.5倍)
文章(複数の語彙)	1	9(9倍)

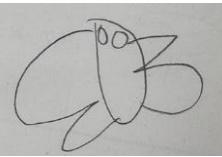
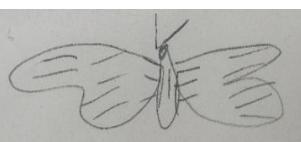
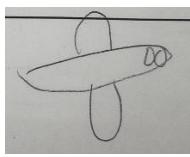
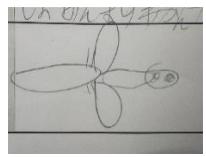
a.文字数・語彙数による量的な変化

2024年度では自由記述の6問中4問の設問で「記述なし」であったが、2025年度のアンケートではすべての設問において記述が見られ、文字数は5.7倍、語彙数は2.5倍と増加し、複数の言葉をつないで回答をしている様子が見られた。

b.描画に見られる表現の変化(表11)

チョウおよびトンボの描画を比較すると2024年度の描画では、いずれも生き物としての全体的な形は捉えられているものの、体の部位や構造の区別は十分とは言えない。一方、2025年度では、チョウにおいては左右2対の羽や羽の模様、足が描かれ、トンボにおいては頭部・胴体・腹部の区別や、足、羽の位置関係が表現されていた。これらの変容から、生徒が生き物を単なる形としてではなく、部位の「共通点や差異」(見方・考え方)をより詳しく表現できるようになったと考えた。

表11 事例生徒Aの描画の変容

(チョウ) 2024	→	2025	(トンボ) 2024	→	2025
	→			→	

c.問題解決を含んだ文章への質的变化

2024年時点では知識が断片的な語の羅列にとどまっていたが、2025年時点では自然事象の語が結びついた文章数が9倍と増加した。さらに「卵はすごく小さくて、見えにくくて顕微鏡で見た」「チョウの食べ物は、花の真ん中の黄色い部分を吸う感じだった」等、問題解決の過程の経験や、事象を関係付けるような記述が出現した。

d.結果

以上より、検討した理科のカリキュラムは知的障害のある生徒に対しても、理科の見方・考え方を働きかせたり、その思考・判断・表現の広がりを促したりする上で、一定の成果を示した事例であると考えられる。

③保護者への効果

単元実施後、単元を学習したことを踏まえ、保護者自身の意識がどのように変化したのか、Googleフォームを使用して、保護者を対象とした質問調査を行った。また、通年を通して、単元を学習したことによる保護者の気づきや保護者自身の変容と考えられる連絡帳の記述について記録した。以下の表12は、それぞれの学部で得られた単元を実施したことによる保護者からのエピソードを抜粋したものである。

表12 単元を通して保護者から寄せられたエピソード

・大人と一緒にいることを好んでいた子が先輩、後輩とも上手く関わっていたことに驚きました。(単元:大きくなるっていうことは【小:生活科】)
・お家で妹とモンシロチョウの成虫と幼虫の食べ物の違いについて議論をする姿が見られた。同じ勉強の話題で知的障害の生徒と小学校の妹が盛り上がる姿を見て、学校での理科の学習の効果を感じ、子どもに対する意識が変化しました(単元:身近な昆虫について知ろう【中:理科】)
・学習した内容に子が興味を持ち、異なる地域の地理や文化に興味を持ったことが嬉しいです。タイミングよく、家庭でも言葉かけ、関わりができたことは、忘れられない経験になると思います。社会科の学習がきっかけで、日本の広さや、色々な文化を知ることになり大変ありがたいです。(単元:身近な地域の移り変わり【中:社会】)
・生活場面での学習、とても勉強になります。家の方でもリサイクルボックスを見つけると一緒に確認するようにし、ぬいぐるみや入れ歯まで回収することを新たに知りました。(単元:公害～つくる責任、つかう責任～【高:社会】)
(下線は執筆者が付けている。)

以上のように、児童生徒の学習効果を実感する様子や、学習を踏まえて子どもへの関わり方が変化したという記述が見られた。また、子どもの資質・能力の育成に伴い、保護者が新たな気づきを得ていることも読み取ることができる。これらの保護者の反応や変容は、本校のカリキュラム・マネジメントの効果が波及していると考えられる。

別紙1（※本体には含まない）

筑波大学附属大塚特別支援学校小学部 教育課程表（令和7年度）

教科等 学年	各教科						特別の教科 道徳	外 国 語 活 動	総合的な学習の時間	特別活動	自立活動	総授業時数
	生活	国語	算数	音楽	図画工作	体育						
1年	460 (-6)	114	114	50 (+12)	35 (-3)	60 (-16)	15 (-2)			22 (+6)	76 (+9)	946 (0)
2年	54 (+16)											
3年	430 (-20)	150 (+50)	150 (+50)	55 (+20)	35 (+1)	80 (0)	38 (+11)			26 (-2)	60 (-11 0)	1024 (0)
4年	82 (+30)											
5年	430 (-20)	150 (+50)	150 (+50)	55 (+20)	35 (+1)	80 (0)	38 (+11)			26 (-2)	60 (-11 0)	1024 (0)
6年	82 (+30)											
計	2640 (-92)	828 (+20 0)	828 (+20 0)	320 (+10 4)	210 (-2)	440 (-32)	182 (+40)			148 (+4)	392 (-42 2)	5988 (0)

※小学部では2学年ごとの複式学級を編成している。表示の時数は1学年分の時数で示しているため、学級ごとの1学年分の時数を2倍にして合算することで、総時数を示している。

※生活科

生活科の灰色部は、研究対象である生活科のうち教科別の指導の時数と研究開発指定前後（2021年度と2025年度）の増減（括弧数字）を示している。

※生活、国語、算数、音楽、図画工作、体育、道徳、特別活動、自立活動

研究開発指定前後（2021年度と2025年度）のカリキュラム・マネジメントを通して調整した授業時数の増減（括弧数字）を示しており、年間の総時数に増減はない。

※総合的な学習の時間

特別支援学校学習指導要領 第1章第3節の3の(2)のウに基づき、小学部では授業時数を設けないこととしている。

別紙1（※本体には含まない）

筑波大学附属大塚特別支援学校中学部 教育課程表（令和7年度）

教科等 学年	各教科									特別の教科 道徳	総合的な学習の時間	特別活動	自立活動	日常生活の指導	生活単元学習	作業学習	総授業時数
	国語	数学	社会	理科	音楽	美術	保健体育	職業・家庭	外国語								
1年	70	70	35 (+35)	35 (0)	35 (-17.5)	35	70	70 (+17.5)	35	17.5	17.5	35	35	332.5 (-105)	105 (-35)	140	1137.5 (-105)
2年	70	70	35 (+35)	35 (0)	35 (-17.5)	35	70	70 (+17.5)	35	17.5	17.5	35	35	332.5 (-105)	105 (-35)	140	1137.5 (-105)
3年	70	70	35 (+35)	35 (0)	35 (-17.5)	35	70	70 (+17.5)	35	17.5	17.5	35	35	332.5 (-105)	105 (-35)	140	1137.5 (-105)
計	210	210	105 (+105)	105 (0)	105 (-52.5)	105	210	210 (+52.5)	105	52.5	52.5	105	105	997.5 (-315)	315 (-105)	420	3412.5 (-315)

※研究開発指定前年度（2021年度）と2025年度の比較である。

※研究指定（2022年度）において、各教科等合わせた指導「生活単元学習」の時間を35時間削減し、教科別の指導として社会科に35時間割り当てるようにした。

別紙1（※本体には含まない）

筑波大学附属大塚特別支援学校高等部 教育課程表（令和7年度）

教科等 学年	各教科											特別の教科 道徳	総合的な探求の時間	特別活動	自立活動	日常生活の指導	生活単元学習	総授業時数
	国語	数学	社会	理科	音楽	美術	保健体育	職業	家庭	外国語	情報							
1年	70 +35	70 +35	35 +35	35 +35	35 (0)	35 +17.5	70 +35	385 +105	35 +17.5	35 (0)	35 +35	35 +35	35 (0)	87.5 +17.5	175 +70	0 -437.5	0 -105	1172.5 -70
2年	70 +35	70 +35	35 +35	35 +35	35 (0)	35 +17.5	70 +35	385 +105	35 +17.5	35 (0)	35 +35	35 +35	35 (0)	87.5 +17.5	175 +70	0 -437.5	0 -105	1172.5 -70
3年	70 +35	70 +35	35 +35	35 +35	35 (0)	35 +17.5	70 +35	385 +105	35 +17.5	35 (0)	35 +35	35 +35	35 (0)	87.5 +17.5	175 +70	0 -437.5	0 -105	1172.5 -70
計	210 +105	210 +105	105 +105	105 +105	105 (0)	105 +52.5	210 +105	1155 +315	105 +52.5	105 (0)	105 +105	105 +105	105 (0)	262.5 +52.5	525 +210	0 -1312.5	0 -315	3517.5 -210

※研究開発指定前年度（2021年度）と2025年度の比較である。

※社会科、理科、生活単元学習

研究開発指定に当たって、高等部では各教科等合わせた指導「生活単元学習」を廃止し、教科別の指導として理科・社会科・情報科に35時間ずつ配分した。研究指定前（2021）年度までは各教科等合わせた指導「生活単元学習」の中で理科・社会科を取り扱っていた。

※補足

日常生活指導にあてていた時間を各教科に割り当てて、教科別の指導の時数を増やした。1年間の総授業時数としては、2021年度から-70時間になる。

別紙2（※本体には含まない）

学校等の概要

1 学校名、校長名

筑波大学附属大塚特別支援学校
校長 小島 道生

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 〒112-0003 東京都文京区春日1丁目5番5号
電話番号 03(3813)5569
FAX番号 03(5684)4841

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

※令和7年12月1日現在

(幼稚部)

	3歳児	4歳児	5歳児	計
学級数	1	0	1	
幼児数	3	1	0	4

(小学部)

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	計
学級数	1		1		1		3
児童数	4	4	4	4	4	4	24

(中学部)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
6	1	5	1	6	1	17	3

(高等部)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
6	1	6	1	7	1	19	3

4 教職員数

※令和7年12月1日現在

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	—	1	—	36	—	1	—	1	8
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3	—	54						

5 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成22～平成24年度

特別経費 「大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実」

「超早期段階における知的・重複・障害児に対する先駆的な教育研究モデル事業」

平成26～平成27年度

特別支援教育に関する実践研究充実事業

特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究

「特別支援学校における障害の重度・重複化、多様化に対応した効果的な指導内容・方法に関する研究」

平成26～27年度

特別支援教育に関する実践研究充実事業

「知的障害特別支援学校における教育課程の編成とその運用プロセスについて、

モデルの指導計画集等を用いた実践的検証」

平成27～平成30年度

インクルーシブ教育システム構築モデル事業

「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進」

平成28年度

特別支援教育に関する実践研究充実事業

「知的障害特別支援学校における一人一人の教育的ニーズに基づくカリキュラム運用プロセスの実証的検証」

平成29年度～平成31年度 (2017年度～2019年度)

学習上の支援機器等教材活用評価研究事業

令和2年度

Specialプロジェクト2020

「特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業」

令和3年度～令和4年度

ICTを活用した障害のある児童生徒に対する指導の充実

「ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究」